



正月気分も落ち着いて早 2 月。最近週末はゆるゆると祖母の部屋の整理をしている。祖母はもう十数年前に他界しているのだが、部屋はずっと手付かずの状態で作保存、というか放置されていた。というのも田舎の広い家のこと。部屋数も多いので一部屋デッドスペースになっても困ることはなかったからだ。ただ私と妻が同居することになって多少荷物が増え、余裕がないわけでもなかったが、「もったいないからどうかしよう」と母の鶴の一声で動き出したのだった。

家ができて 50 年余り、積みも積もったものは膨大で、箆筥（たんす）一つ開けて中身を整理するのも相当時間がかかる。この季節に珍しい晴天の土日に、埃で手を黒くしながら取り組んだ。何か一つ手に取ると、それぞれ興味深いものがあり、簡単には“処分”の袋には放り込みがたく、幾分かさは減るものの、ほとんどの荷物がこちらからあちらに移動するだけ。時代の厚みを前に観念して、部屋に残されたものをつぶさに目を通してみることにした。

戦前戦後モノクロ写真、学生時代のノート、子どもや孫の道具や使わなくなったおもちゃや着物など、部屋に残されたものは、祖母の人生の軌跡そのものを感じられた。祖母を祖母としてしか知らない私にとって、古い持ち物を通じて現れる別時代の彼女は知らぬ人である。人のタイムカプセルを勝手に開けたような後ろめたい気持ちになった。

モノクロや色あせた写真の中に、かつての長岡駅前や長岡市街の往来を収めたものもあっ

た。通りを行く人々の出で立ちも車の形も何もかも、今とは違っていて驚く。三八豪雪のころの写真などはもう同じ場所とは思えない。写真に収められたシーンが遠い昔の別世界のように感じられるが、町の様子やもの形が変わっても、人の気持ちは早々変わらないようである。数枚、また数枚と写真をめくっていくと、往時の長岡を背景に若かりし日の祖父母らの笑顔が光っていた。

ところで、生前祖母は常々、私に「普通が良い」と説いていた。幼いころの私は「ふつう」ということの意味がよく分からなかったし、今でも真剣に考えてみる価値があると思う。戦前戦後、少女から女性に。昭和から平成へ、母から祖母にと人生を歩んでいった彼女にとって「普通」とはどんな生き方だったのか、在りし日の祖母やその人生に思いを巡らせたり、晩年に掛けてもらった言葉を思い返してみたりしていると、今の悩みや心配事が些末なことと思えてくる。壁にぶち当たったら歴史や過去にあたるのも良さそうだ。先人に学ぼう。